



Title	記憶と忘却の葛藤 : Beloved における語りの構造
Author(s)	太田, 瑞穂
Citation	Osaka Literary Review. 1991, 30, p. 92-104
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/25435
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

記憶と忘却の葛藤 —*Beloved*における語りの構造

太田 瑞穂

“124 was spiteful. Full of a baby’s venom.”¹⁾

このような書き出しで、Toni Morrisonの最新作*Beloved*は始まる。124が家を指し示しているということを理解するには、少し先まで読まなければならないし、何故その家が赤ん坊の悪意に満ちているのかを知るには、更に読み進まなければならない。読者は突然、何やら無気味な、悪意に満ちた世界へ投げ込まれてしまう。Morrisonは、この印象的な書き出しについて、“Because the *in medias res* opening that I am so committed to is here excessively demanding. It is abrupt, and should appear so.”²⁾と、説明している。奴隷たちが、何の準備もできず、身を守るものも持たず、強制的に連れ去られるのと同じように、読者は見知らぬ場所、Morrisonの作り出した小説の世界へ不意に引きずり込まれるのである。読者は、戸惑い、混乱し、不安を覚える。そして、何故悪意に満ちているのかを知りたいという衝動に駆られる。

事件の途中から話を始める (“*in medias res*”) 方法は、小説全体の語り的手法とも一致する。この小論では、このような語りの構造と主題との関連性を考察すると共に、Morrisonの文体の特徴や表現上の技法を明らかにしていく。

I

*Beloved*は、南北戦争前後の時代を背景とし、逃亡奴隷 Sethe を主人公にした物語である。Setheが娘 Denver と共に住んでいるオハイオ州の家には、赤ん坊の幽霊が、18年間住みつき狼藉を働く。³⁾この赤ん坊は、Sethe

の娘で、Sethe 自身が2歳のわが娘の喉をかき切って殺害したという事実が、小説の初めの方で明らかにされる。それでは、いつ、何処で、何故、そしてどのように Sethe は娘を殺したのかという疑問が自と湧いてくるが、それに対する答えをテキストはなかなか与えてくれない。

最初にある不思議な事実を呈示し、それに関する情報を少しずつ明らかにしていくという語りの手法は、テキストの細部においても随所に見られる。例えば、Sethe は“they took my milk” (p.17) と繰り返し述べることによって、暴行された事実を伝えようとするが、この曖昧な言い回しは、次の文によって幾らか意味がはっきりとしてくる。“They took my milk and he saw it and didn't come down?” (p.69) Sethe の夫 Halle が事の一部始終を屋根裏から目撃していたにもかかわらず、Sethe を助けようとしなかったのが、彼女は憤激する。“he”が Halle であることは前後関係から推測できるが、“They”が誰であるかはこの時点では明らかにされていない。そして、“The pupils must have taken her to the barn for sport.” (p.228) の文で、誰が何処で何のために行ったかが具体的に示される。

Sethe の背中にある“tree”についても同じような事が言える。Sethe は“I got a tree on my back.” (p.15) と言う。逃亡中の Sethe を助けた白人の娘 Amy は、その木について、桜の木で、枝も葉もあり、幹は裂け、赤い樹液が滴り落ちていると表現する。“It's a tree, Lu. A chokecherry tree. See, here's the trunk—it's red and split wide open, full of sap, and this here's the parting for the branches.” (p.79) 次第に、その木は、背中の感覚が麻痺するほど鞭で打たれたためにできた傷跡であることが明らかにされる。Sethe が自分の受けた凌辱を女主人に訴えた (“they took my milk”) ために罰せられたのである。“Them boys found out I told on em. Schoolteacher made one open my back, and when it closed it made a tree. It grows there still.” (p.17)

このように、1つの謎めいた言葉に対して、後に答えが与えられるわけであるが、そのことによって、その言葉は、その答え以外の意味も帯びる

ようになる。意味が限定されるように見えながら、その言葉は新しい意味を付与されて、広がりを見せるのだ。つまり、具体化することによって、却って抽象性が増す。Setheの背中に刻印された“chokecherry tree”は、彼女の消えることのない悲しみ、悲惨な過去を表しており、決して癒やすことのできない心の傷跡を象徴している。

また、この“chokecherry tree”は、Setheの属性を表す言葉として機能している。⁴⁾最初に謎めいた言葉が現れ、その言葉が繰り返しテキストの中で使われ、意味が補強されるにつれ、その言葉のイメージが膨らむ。そして、例えばこの“chokecherry tree”という言葉は、強いインパクトをもって、Setheと分かち難い言葉として我々の脳裡に刻み込まれる。Morrisonは、“chokecherry tree”という何の変哲もない言葉に、独自の生命を吹き込み、比喩的な響きを与え、文章の中でこの言葉をくっきりと浮かび上がらせることに成功している。“they took my milk”の文もやはり、Morrison独自の意味合いを持っている。

結論を先ず述べて、少しずつ話の核に近づくという、謎解きのパターンとも言うべき語りの手法は、テキストを支える重要な基本構造となっている。Setheが我が子を殺した理由をなかなか明らかにしないということが、この小説の大きな粹組みとなっているが、同じ様な構造をもつ小さな粹組みは、Setheの子殺しという内容と絡んで、他の場所にも見い出される。

Denverは、Lady Jonesに勉強を教わり、学ぶことの喜びを知る。ところが、ある時同じクラスの少年 Nelson Lordが彼女の母に関するある質問をして以来、Denverはあれほど好きだった勉強を学びに行くことを諦めてしまう。Nelson Lordがした質問が何であるかはなかなか明らかにされない。Denverは、その質問の真為を確かめたいと思っているにもかかわらず、事実を知るのが恐ろしくて誰にも尋ねることができない。“She was too scared to ask her brothers or anyone else Nelson Lord’s question because certain odd and terrifying feelings about her mother were collecting around the thing that leapt up inside her.” (p.102) 勇気を奮

い起こして Sethe にその質問を試してみたものの、答えを聞きたくないという気持ちがあまりにも強すぎたのか、その時以来2年間 Denver は聴覚を失う。質問の内容を確かめたくないという気持ちに呼応するかのようになり、テキストはしばらくの沈黙を保った後、Nelson Lord の質問の内容を明らかにする。“Didn’t your mother get locked away for murder?” (p.104)

聴覚を奪うほど Denver に衝撃を与えた質問、自分の母親が我が子をその手で殺したのかどうかという問いは、なかなか発せられない。これは、Sethe が我が子を殺した理由が明らかにされないという語りの構造と、一種パラレルな関係を成している。

迂回に迂回を重ねて、話の核心に近づくのを避けるように、Sethe は別の話ばかりしていたが“Circling, circling, now she was gnawing something else instead of getting to the point.” (p.162)、物語の後半で遂に Sethe が娘を殺害するに到った経緯が明らかにされる。逃亡してから約1か月後、Sethe は庭で、かつての農園監督が奴隷補獲人と共に近づいてくる姿を目にする。その時 Sethe の心に浮かんだのは次のような事である。

And if she thought anything, it was No. No. Nono. Nonono. Simple. She just flew. Collected every bit of life she had made, all the parts of her that were precious and fine and beautiful, and carried, pushed, dragged them through the veil, out away, over there where no one could hurt them. Over there. Outside this place, where they would be safe. (p.163)

この上なく大切に最愛の分身である我が子が、誰からも決して傷けられたり汚されたりすることなく安全でいられるように、そして、彼女に自分と同じ悲惨な人生を送らせないように、Sethe は2歳の娘の喉を鋸でかき切ってしまうのである。

このように、Sethe の子殺しの理由をテキストはなかなか語ろうとしない。また、最初に結果を呈示して、少しずつ情報をつけ加えるという語りの手法は、テキストの細部においても至る所で用いられている。

II

我が子を殺害した後、Setheは身をひさいで“Beloved”と刻んだ墓を建て、娘の幽霊が家に住みつき、Setheを悩ます。かつて彼女と同じケンタッキーの“Sweet Home”という農園の奴隷だったPaul Dが18年ぶりにSetheを訪れ、幽霊を追放するが、入れ替わるようにして、Belovedと名乗る20才ぐらの女性が現れ、Setheの家で暮らし始める。

Belovedには、他者に己れの過去を語らせるという不思議な力が備わっている。Paul Dは、“She reminds me of something. Something, look like, I’m supposed to remember.” (p.234)と説明している。彼の口につけられたハミが「沈黙」と「抑圧」を象徴しているように、彼は悲惨な過去を“tobacco tin”の中に閉じ込め、決して語ろうとしなかったのだが、彼女に触発され、重い口を開く。“His tobacco tin, blown open, spilled contents that floated freely...” (p.218)

Denverも自分の過去についてBelovedに語る。母から聞いたお気に入りの話、逃亡中の母が白人の娘に助けられて自分を出産した時の様子を話す。母から聞いた話をBelovedにすることによって、母がその時見て、感じたことをそのまま追体験する。人に語ることによって、母の話に命を吹き込むことができるのである。そして、語り手Denverと聞き手Belovedが一体となって過去を再構築するのである。

Denver was seeing it now and feeling it — through Beloved. Feeling how it must have felt to her mother. Seeing how it must have looked. . . . So she anticipated the questions by giving blood to the scraps her mother and grandmother had told her — and a heartbeat. The monologue became, in fact, a duet as they lay down together. . . . Denver spoke, Beloved listened, and the two did the best they could to create what really happened, how it really was, something only Sethe knew because she alone had the mind for it and the time afterward to shape it. (p.78)

Morrison はここで、過去を他の人に語ることの重要性を強調しているように思われる。ある人の過去を他者がまた別の人に語ることによって、その過去は生き生きしたものとして存在し続ける。Morrison は、過去を語り継ぐことがいかに大切であるかを説いている。

Sethe, Paul D, Denver, 最後には Beloved 自身も過去を語る。断片的に配されたそれぞれの視点から語られる過去の物語は、Sethe の過去を敷衍すると同時に修正する働きを持つ。Marilyn Sanders Mobley は、ここには、黒人の oral tradition に特徴的な“call and response”が息づいていると説明している。“In that the fragments constitute voices which speak to and comment on one another, the text illustrates the call and response pattern of the African-American oral tradition.”⁵⁾

この“call and response”は、ジャズやブルースなどの黒人音楽の特徴であるが、小説の第2部の Sethe, Denver, Beloved のモノローグにもこの pattern が見い出される。ジャズの“call and response”について Bernard W. Bell は次のように説明している。“Jazz uses the call-and-response pattern with the antiphonal relationship occurring between two solo instruments or between solo and ensemble.”⁶⁾まるで、ソロ楽器と、その他の伴奏楽器による“call and response”のごとくに、“Beloved, she my daughter. She mine. See.” (p.200) で始まる Sethe の語りの次には、“Beloved is my sister.” (p.205) で始まる Denver の語り、続いて、“I am Beloved and she is mine.” (p.210) で始まる Bevoved の語り配されている。しかもソロに当たる Sethe の語りの部分は、4ページ余りにわたって1つのパラグラフで構成されており、力強く、畳みかけるように語られる。“Beloved, she my daughter. She mine. See.”という出だしは、“she” “She” “See”に強勢が置かれるが、強く読まれる語と語の間隔が次第に短くなり、文の勢いが増す。これは、Sethe が Beloved に、殺さざるを得なかった理由を一刻も早く理解してもらいたいという気持ちを表しているかのようなのである。

黒人音楽の響きは、小説の他の箇所においても感じられる。Denverの献身的な看護を受けてすっかり元気を取り戻した *Beloved* が、陽気に踊り出す姿を描写した次のパッセージは、黒人音楽特有の軽快なリズムに溢れている。“Upstairs *Beloved* was dancing. A little two-step two-step, make-a-new-step, slide, slide and strut on down.” (p.74) 2つの“slide”という語の間に pause (=弱拍)を補えば、この一節は、弱強弱強というリズムを見事に形成しており、ドラムの響きを想い起こさせる。

ところで、*Sethe* 自身は自分の過去についてどのように感じているのだろうか。*Morrison* は“rememory”という言葉を作り出して、“remember”とは区別して使っているように思われる。繰り返し甦ってくる過去の記憶“rememory”について、*Sethe* は *Denver* に次のように説明する。

If a house burns down, it's gone, but the place — the picture of it — stays, and not just in my rememory, but out there in the world. What I remember is a picture floating around out there outside my head. I mean, even if I don't think it, even if I die, the picture of what I did, or knew, or saw is still out there. Right in the place where it happened. (p.36)

たとえ家が焼けて消失したとしても、その“picture”は、個人の“rememory”の中にとどまるばかりでなく、現実の外の世界に広がる。ある人が死んでも、その人が見たり聞いたり経験したことは、この世に存在する。

他の人とその“picture”を見ることができるとかという *Denver* の問いに対して *Sethe* は、もちろん見ることができると答え、さらに、次のように続けている。

Someday you be walking down the road and you hear something or see something going on. So clear. And you think it's you thinking it up. A thought picture. But no. It's when you bump into a rememory that belongs to somebody else. Where I was before I came here, that place is real. It's never going away.... The picture is still there and

what's more, if you go there. . . . it will happen again ; it will be there for you, waiting for you. (p.36)

ある人の“rememory”で起こったことを別の人が同じように経験することができる。それは、その人の頭が考え出した作り事 (“thought picture”)ではなくて、実際に存在するものなのである。Setheにとって“rememory”は単なる過去の思い出ではなく、今でも生々しい現実のものである。そこに足を踏み入れる者を待ち構えていて、Setheが受けたのと同じ仕打ちを与えようとしている。故にそのような場所に絶対行ってはならないと娘に警告し、過去のことを知りたがる Denver に対して、決して多くを語ろうとはしない。

“rememory”という言葉は、小説の中で繰り返し用いられ、動詞として使われることもある。“Thank God I don't have to rememory or say a thing.”(p.191)そして、忌まわしい思い出、或いは、“old rememories that broke her heart” (p.95)のように、思い出す時に痛みが伴うというニュアンスで使われることが多い。

Setheにとって過去の記憶の中の出来事は、苦痛に満ちていて (“hurt”)、口にするのも耐え難い (“unspeakable”) のだ。「未来」とは、「過去」を寄せつけないことである“the future was a matter of keeping the past at bay” (p.42) と考えていることから分かるように、彼女は過去を排除しようとする気持ちが非常に強い。従って、Setheは思い出すのも忌まわしい自分の過去について語ろうとはしないのである。

既に考察したような、テキストの語りの構造と Sethe の感情の関係について、Marilyn Sanders Mobley は的確な説明を与えてくれる。

While all texts develop to a certain extent by secrecy or by what information they withhold and gradually release to the reader, the text of *Beloved* moves through a series of narrative starts and stops that are complicated by Sethe's desire to forget or “disremember” the past. Thus, at the same time that the reader seeks to know “the how

and why” of Sethe’s infanticide, Sethe seeks to withhold that information not only from everyone else, but even from herself.⁷⁾

「何故、どのようにして」Setheは我が子を殺したのかということテキストはなかなか読者に語ろうとはしないということと、自分の娘を殺した理由を人にも自分にも明らかにしたくないという気持ち、言い換えれば、Sethe自身の過去を忘れたいたいという気持ちは、密接に関わり合っている。

読者が知りたいと思う情報の遅延は、Roger Saleが指摘しているように、読者がテキストを読み進めるための推進力となっている。“Morrison is so constantly telling you and not telling you, telling you a bit more but leaving you wondering if you’ve missed something, that she encourages, almost forces, readers to read too fast, to rush ahead to the clarifying moments.⁸⁾”とは言うものの、この語りの構造は、推進力以上の役割を果たしているように思われる。殺害の理由が明らかになるまで、過去の記憶が少しずつ語られるのであるが、その記憶の語りを通して、読者は、奴隷制の下に置かれた登場人物の物理的状況を知り、さらに重要なことには、心理的状況をも経験するのである。登場人物の心理状態はテキストではほとんど説明されていないにもかかわらず、Morrisonのこの小説形態により、読者はそれを理解するのである。Mobleも次のように言及している。“Morrison’s novel exposes the unsaid of the narratives, the psychic subtexts that lie within and beneath the historical facts.”¹⁰⁾読者は、殺害するに到った動機を読み進めるのであるが、実は、その説明に辿り着く前に、その動機を理解してしまっている、とも言えるのである。

III

さて、*Beloved*は、一体何者で、何処から、何のためにやってきたのであろうか。*Beloved*の顎の下にある傷跡“the little curved shadow of a smile in the kootchy-kootchy-coo place under her chin” (p.239) や、喉を切

る時に Sethe が頭を支えたためにできたと思われる額の三本の引っ掻き傷は、Beloved が Sethe の殺害した娘の生まれ変わりであることを示す証拠となる。また、Beloved は、Sethe が子供たちに歌って聞かせた Sethe 自身の創作の歌を記憶していることからそのことが分かる。Beloved は水の中から現れ、¹¹⁾あの世に一人孤独に置き去りにしたことへの埋め合わせとして、Sethe に対して、愛を際限なく要求する。それと同時に、“You left me.” (p.217) と繰り返し述べて、自分を殺し、しかもその記憶を消そうとしている Sethe を激しく非難する。

しかしながら、Beloved は、単なる Sethe の殺した娘の生まれ変わり以上の意味があるように思われる。「Beloved は自分の姉と思うか」という Paul D の問いに対して、Denver は、“At times. At times I think she was —more.” (p.266) と答えている。小説後半部に現れる、Beloved の悲哀を含んだ叙情的なモノログには、奴隷船に乗っていた時の様子が記されている。“a hot thing”という言葉の繰り返し、“the man on my face is dead” “the men without skin bring us their morning water to drink” (p.210) “the iron circle is around our neck” (p.212) といった表現は、奴隷船に詰め込まれたアフリカ人の凄惨な光景を暗示している。また、このモノログの重要な特徴として、句読点が用いられず、その代わりに、文と文の間に空間が配されているということが挙げられるが、この空間は、Beloved の死と再生までの空白部分を表していると同時に、Beloved の存在の “timelessness” を表していると Mobley は分析する。“there are literal spaces between groups of words that signal the timelessness of her presence as well as the unlined spaces of her life”¹²⁾ このように文体の上からも、Beloved は時間を超越した存在であり、Sethe の子供として生きて2年間の歳月を越えた遠い過去の記憶を備えた存在であることが理解できよう。従って、奴隷船の記憶をもつ Beloved は、奴隷となった人々の象徴である、と行うことができる。

Terry Otten も、Beloved を象徴的な存在として捉えている。“Clearly

she is a composite symbol, not just Sethe's dead child to exact judgment, but also the representative of the 'Sixty Million and More' to whom Morrison alludes in her headnote."¹³ Morrison 自身、あるインタビューの中で、*Beloved* の象徴性を強調している。「〔6千万余の人々は〕奴隷制の犠牲になった人たち。奴隷輸送船の中で死んでいった人たち。*Beloved* はこの人たちの象徴なんですよ。生きているアフロ・アメリカ人から思い出されないうまま、それでも気づかれ認められるのを待っている人たちを代表しているのです。この人たちは生者に愛されたいと焦られる一方で、自分たちを無視し、先祖を認めようとしないう彼らを責めている。」¹⁴

この小説は、“This is not a story to pass on.” (p.275) という謎めいた言葉のリフレインで閉じられている。何故このように書いたのかについて、Morrison は次のように説明する。「このリフレインは authorial voice です。*Beloved* の記憶を抹殺してしまいたいという人々の気持ち——それは同時にあの middle passage の記憶を抹殺してしまいたい気持ちでもあるのですが——を示しているのです。耐えられないほど痛ましく、語る言葉もない過去を、思い出したくない、語りたくないという reluctance なんですよ」¹⁵ 黒人自身が過去を語りたくない、忘れてしまいたいという気持ちを抱いているのである。一方、このリフレインにはアイロニカルな響きがある。“pass on”には、“forget”あるいは“ignore”という意味があるので、これは無視したり、忘れてしまったりしていい物語ではないということである、と Morrison は述べている。

以上、*Beloved* の語りの手法と主題がいかに深く関連しているかを、Morrison の文体や技巧にも光を当てつつ、考察してきた。Sethe の過去を読者になかなか明らかにしないというテキストの語りの構造は、Sethe 自身の、過去を思い出したくない、語りたくないという気持ちと一致している。更に、*Beloved* の持つ象徴的な意味も考慮すれば、民族としての黒人の、過去の記憶を抹殺したい、言葉にしたくない、という気持ちも込められているということを我々は強く意識しなければなるまい。語るという行

為が、たとえどんな苦しみが伴うとしても、過去を見据えて語り継ぐことの重要性を、この小説は示唆している。

注

- 1) Toni Morrison, *Beloved* (New York: Alfred A. Knopf, 1987), p. 3. 以下本文からの引用はこの版により、頁数のみを引用末尾に記す。
- 2) Toni Morrison, "Unspeakable Things Unspoken: The Afro-American Presence in American Literature," *Modern Critical Views: Toni Morrison*, ed. Harold Bloom (New York: Chelsea House Publishers, 1990), p. 228.
- 3) 登場人物たちは幽霊の存在を疑問に思わない。“(Sethe) just took it for granted” (p. 37) Bernard W. Bell は、Morrison の小説を、“Gothic fable” の伝統の中に位置づけている。彼は“Gothic fable”の特徴を“generally short poetic narratives whose celebration of the beauty, truth, and possibilities of life is derived from the exploitation of its magic, mystery and terror”と説明している。Bernard W. Bell, *The Afro-American Novel and Its Tradition* (Amherst: The University of Massachusetts Press, 1987) p. 270 を参照。
- 4) 登場人物はおのおのの属性を表す言葉と深く結びついている。Baby Suggs — quilt with orange patches, Denver — emerald closet, Paul D — tobacco tin, Halle — churn
- 5) Marilyn Sanders Mobley, “A Different Remembering: Memory, History and Meaning in Toni Morrison’s *Beloved*,” *Modern Critical Views: Toni Morrison*, ed. Harold Bloom (New York: Chelsea House Publishers, 1990), p. 193.
- 6) Bell, p. 27.
- 7) Mobley, p. 194.
- 8) Roger Sale, “Toni Morrison’s *Beloved*,” *Modern Critical Views: Toni Morrison*, ed. Harold Bloom (New York: Chelsea House Publishers, 1990), p. 167.
- 9) Mobley, p. 193.
- 10) Mobley, p. 193.
- 11) Terry Otten は、水は再生と、奴隷船の航路の両方を象徴していると述べている。“Water serves not only to symbolize rebirth but the torturous passage of a slave ship en route to America,” Terry Otten, *The Crime of Innocence in the Fiction of Toni Morrison* (Columbia: University of

Missouri Press, 1989), p.84を参照。

12) Mobley, p.196.

13) Otten, p.83.

14) 吉田廸子「トニ・モリスンを訪ねて」『英語青年』1991年2月号 pp.20-21.

15) 吉田廸子 p.21.